

芸術と芸術療法の融合に対する認識の解明： 統計的視点からのアプローチ

吉沼 智[†] 伊集院 清一[‡] 加藤 千恵子[†] 寺沢 英理子 保高 一仁
青木 滉一郎[†] 後藤 芙未子[†]
東洋大学総合情報学部[†] 多摩美術大学美術学部[‡]

1. 序論

わが国では、精神科医療や心理臨床において絵画や音楽などの芸術活動が用いられ、「芸術療法」として発展を遂げてきた。その特徴として、作品の芸術性というよりも、創作を通じたクライアントの変化を重視し、促進するといった点が挙げられている[1]。同時に、芸術療法の活動に、芸術性の追求といった「芸術」の視点を取り入れることで、同分野の技法やカリキュラムの発展が期待されているという側面もある。そこで、本研究では、芸術療法に携わる人々の芸術・芸術療法に対する認識と、両分野の融合に対する考え方を理解するために、質問紙調査を実施した。調査結果の定量的な分析により、芸術家・臨床家といった人々の認識の差異を明らかにし、今後の連携の方向性を提示することを目的とした。

2. 方法

2.1 質問紙調査

調査対象者は、2016年11月と2017年11月に美術大学のキャンパスで開催されたシンポジウムの参加者であり、合計86名から回答を得た。欠損値を含む回答を除いた有効回答数は62件（男性20名、女性42名）であった。質問項目は、回答者の属性（年齢、性別、職業）に関する項目と、芸術および芸術療法に対する考え方を問う選択形式の質問（9項目：質問①～⑨）、自由記述形式の質問（4項目）であり、選択式の質問項目に対しては、「まったく思わない（1）」～「非常に思う（7）」の7件法で回答を依頼した（表1）。

2.2 分析方法

62名の調査対象者を、個々人の職業に応じて「芸術家」、「臨床家（医師、臨床心理士、芸術療法士、精神保健福祉士、作業療法士、介護福祉士）」、「教員・講師（大学・学校教員な

ど）」、「学生」の4群に分類した。質問紙のうち選択形式の9項目に対する回答値について、Kruskal-Wallis検定およびBonferroni法による多重比較を行い、職業別に回答値を比較した。

また、9項目の回答値を用いてWard法によるクラスタ分析を実施し、62名の対象者を複数のクラスタに分類した。分析結果を踏まえ、職業別・クラスタ別の回答について考察を行った。

3. 結果および考察

有効回答を得た調査対象者のうち、芸術家は7名、臨床家は31名、教員・講師は8名、学生は16名であった。職業別の回答値（表1）について、Kruskal-Wallis検定を行ったところ、質問②（ $p<.05$ ）、質問⑤（ $p<.05$ ）、質問⑧（ $p<.01$ ）、質問⑨（ $p<.05$ ）に関して、職業の主効果が有意であった。多重比較の結果、質問②、質問⑤の職業間で回答値の有意差はみられず、質問⑧では、臨床家よりも芸術家の回答値が有意に大きかった（ $p<.01$ ）。質問⑨では、教員・講師よりも芸術家の回答値が有意に大きかった（ $p<.05$ ）。有意な主効果がみられた4項目に注目すると、いずれも芸術家の回答値が最も高い値を示した。芸術家は他の職業の人々と比べて、芸術家による芸術療法の発展に期待を寄せており、芸術家・芸術療法家が双方の分野について学ぶ必要性を感じていることが示された。芸術家は、芸術活動の治療的な効果を認識し、芸術療法を学ぶ必要性を感じるとともに、芸術性の追求が治療行為にもたらす効果を、日頃から模索していると考えられる。それゆえに、芸術療法の発展において、芸術家が果たす役割の大きさをより強く実感しているといえよう。

また、クラスタ分析の結果、62名の対象者は3つのクラスタ（CL1: 27名、CL2: 20名、CL3: 15名）に分類された。クラスタ別に算出した、質問①～⑨に対する回答値の平均を図1に示す。

表1 質問①～⑨に対する職業別の回答値

質問項目 (選択形式)	職業	平均値	SD
①シンポジウムに参加して、“芸術”に対する考え方が変わったと思いませんか？	芸術家	5.14	1.86
	臨床家	4.68	1.54
	教員・講師	4.63	0.92
	学生	5.50	0.82
②シンポジウムに参加して、“芸術療法”に対する考え方が変わったと思いませんか？	芸術家	6.14	1.07
	臨床家	4.77	1.50
	教員・講師	4.50	1.20
	学生	5.38	0.96
③シンポジウムに参加して、“芸術”について、学びたいと思いませんか？	芸術家	5.86	1.35
	臨床家	5.55	1.23
	教員・講師	5.38	0.92
	学生	5.94	0.93
④シンポジウムに参加して、“芸術療法”について、学びたいと思いませんか？	芸術家	5.86	1.35
	臨床家	5.45	1.12
	教員・講師	5.13	0.99
	学生	5.94	0.85
⑤芸術活動をしている人が、“芸術療法”の発展をもたらすことができると思いますか？	芸術家	6.43	0.79
	臨床家	5.26	1.34
	教員・講師	6.25	0.71
	学生	5.88	1.15
⑥“芸術”はあなたの“芸術療法”のとりえ方に影響を与えたと思いませんか？	芸術家	6.29	1.89
	臨床家	5.42	1.41
	教員・講師	5.50	1.41
	学生	5.38	1.36
⑦芸術活動をしている人と臨床家が、互いの活動のために協働することができますか？	芸術家	6.57	0.53
	臨床家	5.65	1.25
	教員・講師	5.75	1.28
	学生	6.00	0.97
⑧芸術活動をしている人が“芸術療法”を学ぶ場は必要だと思いますか？	芸術家	6.71 ^A	0.49
	臨床家	4.39 ^B	1.76
	教員・講師	5.13 ^{AB}	1.13
	学生	5.44 ^{AB}	1.09
⑨芸術療法をしている人が“芸術”を学ぶ場は必要だと思いますか？	芸術家	6.71 ^a	0.49
	臨床家	5.71 ^{ab}	1.04
	教員・講師	5.38 ^b	1.19
	学生	5.69 ^{ab}	1.49

異符号間に有意差あり (大文字: p<.01, 小文字: p<.05)

CL1 では、回答値の平均が、いずれも4点 (“どちらでもない”) ~ 6点 (“思う”) の範囲内の値であった。CL1 に属する人々は、芸術・芸術療法に対する学習意欲や、芸術が芸術療法にもたらす影響、芸術家と臨床家の協働、相互学習の必要性などについて、どちらかといえば賛同する立場であるといえよう。CL2 では、質問②を除くすべての項目で、回答値の平均が6点以上となった。CL2 に属する人々は、芸術と芸術療法の連携や、両分野を共に学ぶ必要性を、特に強く感じていることがうかがえる。

Clarification of understanding of combination between art and art therapy -An approach from the viewpoint of statistical analysis-

† Satoshi Yoshinuma, Faculty of Information Sciences and Arts

‡ Seiichi Ijuin, Faculty of Art and Design

CL3 では、質問①、②、⑥に対する回答値の平均が4点を下回った。CL3 に属する人々は、他の対象者と比較すると、芸術・芸術療法に対して一貫した考え方を維持していると推察される。

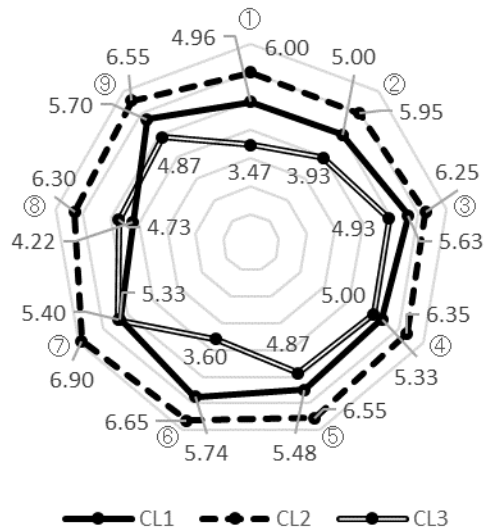


図1 質問①～⑨に対するクラス別回答値

CL2 に属する対象者の半数以上は、芸術家および学生であった。自由記述回答からは、芸術家としての視点から、芸術療法に対して強い関心や期待を抱いており、両分野の連携を望む様子が見られた。これに対し、CL1 に属する対象者は臨床家が半数を占めていた。芸術・芸術療法の融合に期待を寄せるとともに、双方の役割や対象の違いに焦点を当てた記述がみられた。CL3 に属する対象者の記述からは、美術大学・芸術大学で芸術療法を教えることについて、より詳細な検討を望んでいる可能性が示唆された。

4. 結論

芸術家は、実体験を通じて芸術の治療効果を見出し、芸術療法と協働する意義を見出していると思われる。臨床家の視点からも、芸術性の追求が芸術療法に対して果たす役割を理解する体験が重要といえる。今後は、質問紙から得た量的データと、自由記述の関連を明らかにするため、定量的な分析手法の検討が望まれる。

参考文献

[1] 川田都樹子, 西欣也, 調査報告書「アートセラピーの現状と課題——アンケートとインタビューから」, 甲南大学人間科学研究所 (芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究), 2012.